民医連厚生事業協

共済だより

2021年
1月
第153号

発行所●全日本民医連厚生事業協同組合
〒113-0034 東京都文京区湯島2-4-4
平和と労働センター6F
TEL03-5842-5650　FAX03-5842-5652
E-メール:k-tayori@min-iren.gr.jp
（共済だより用）
kyousai@min-iren.gr.jp
（厚生事業協宛）
ホームページ:https://min-jigyo.or.jp

頌春

いわさきちひろ「雪の幻想」1971年（14ページに作品のコメントと美術館のご案内をしております）

主な記事

- 新春エッセイ **「結局なんとかなってきた」**／椎名　誠
- **伝えていきたい私の民医連⑯** 千葉・八田　英之（中）
- シリーズ **ウィズコロナで大切なこころのケアとは③** 怒りとのつきあい方
- シリーズ **「共済」⑤**～いのちとくらしを支え社会をつくる～／本間　照光
- **いま、なぜ憲法改悪なのか** パートⅡ㉞ 若手弁護士の会
- **縮図からみる世界㉝** 古い推理小説を読むことは…／斎藤　貴男

※「私の趣味・フィールド紹介」は今月号はお休みさせていただきます。

2020年度
スポーツ文化企画
のお知らせ
https://min-jigyo.or.jp

ログイン　2020
パスワード　1192
（半角数字）

携帯電話でご応募の方はこちらからどうぞ
応募先のメールアドレスが読みとれます

結局なんとかなってきた

椎名誠

三十代に十年ほど勤めていた会社をやめてフリーのモノカキ稼業となった。従業員三十人ぐらいの業界雑誌の編集長をやっていて会社は銀座にあったのですぐ映画館などに逃げられるし、なにかと面白い日々だったのだけれどわが人生、この業界の周辺をウロチョロするだけで終わっていくのじゃつまらないなあ、と思うようになった。会社員でいると給料という企業の庇護の元にあるけれど、フリーのモノカキは、一人でアクシデントに出あったら路頭に迷い、大げさにいえば途方に暮れることになるかもしれない。妻子もいた。かれらの人生はどうなるのだろうか、とも考えたが、それで思いとどまったらなんのために会社をやめたのかわからない。

で、仕事のクチがあるといろんな外国にでかけていった。行く場所は欧米の大都市というケースはまずなく、小さな国の辺境のようなところが多かった。

十六ミリの映画で（当時ビデオはなかった）たぶん日本人が見たこともないだろう、というような辺境を撮影する仕事を最初にやっていた。チームは三〜四人。ぼくは以前から

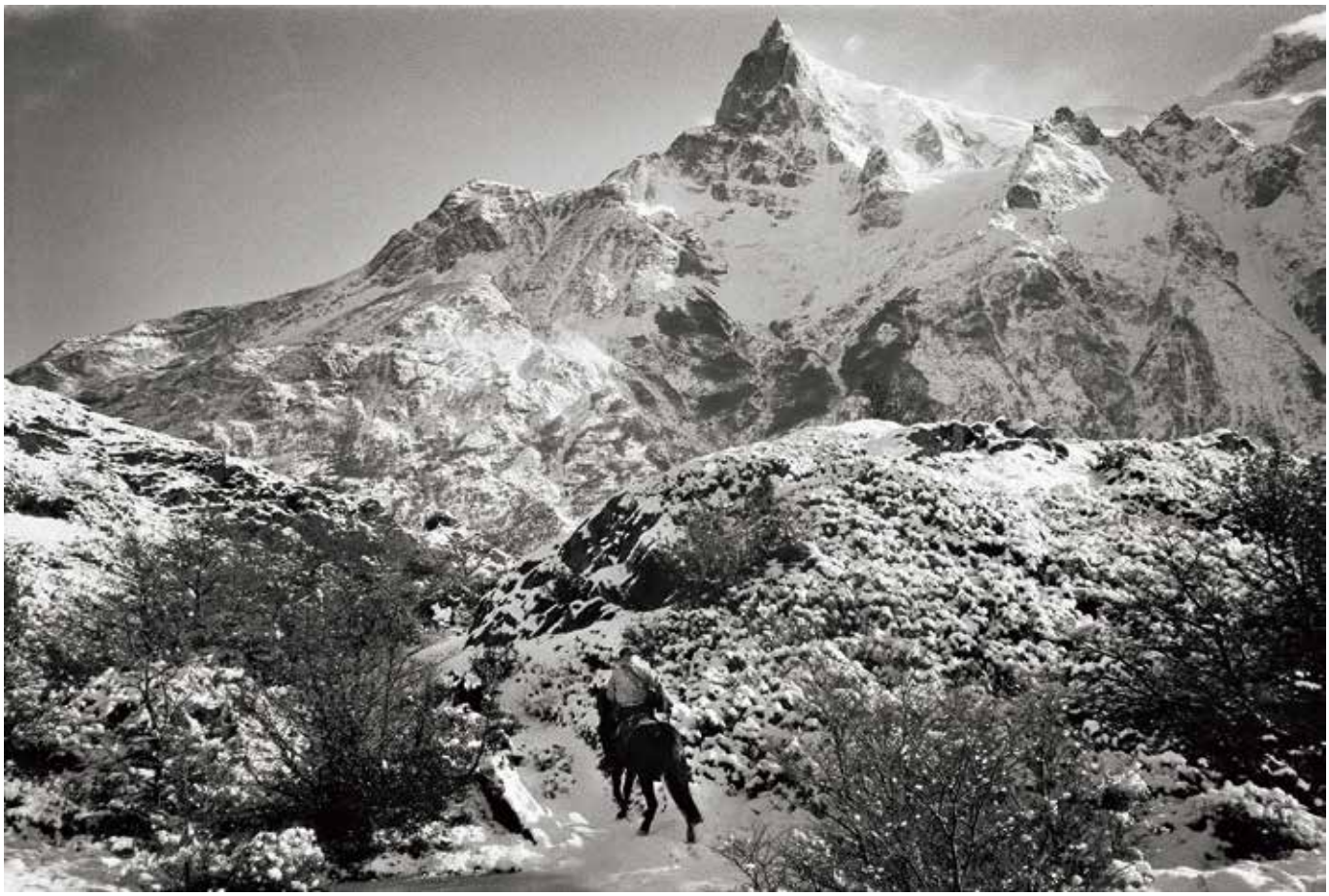
日本の山や島にキャンプに出かけていたので、野外生活は慣れている。自炊というのも好きだった。バザールなんかにいって豚肉の骨つき十二キロぐらいのカタマリを邦貨百円ぐらいで手に入れてくる。三日ぐらいそれだけ食っていた。しかし、なかなかその場所の地図が手に入らなかったり、ネィティブと言葉がまるで通じなかったりして、思わぬ難問にも直面した。カメラマンが海岸沿いの岸壁を登り、足を踏み外して落ちてしまったときは焦った。病院に連れていかなければ危ない、ということがシロウト目でもわかったのだ。近くの集落に行ってそのことを話したがまるっきり通じない。

そのとき遠くから見ていた娘さんが何事か緊迫した表情で我々に話しかけてきた。怪我したカメラマンをあんたら二人でかついで私についてこい、と言っているようだった。海岸沿いの道を必死についていった。

木造の、昔は白かったのだろう建物につれていってくれた。中から四十年配の白人の混血らしい女性が出てきて家の中にいれてくれた。ぼくたちぐらいのカタコトの英語を喋る。意識を失なっていたカメラマンは片足のくるぶしを骨折していた。その家にいた人は現役かどうか分からなかったが島に少し前にやってきた看護婦さんのようで、その家でできる応急処置をしてくれて翌日また我々がかついで港に停泊中の船にいた医者に見てもらった。南島なので壊疽寸前だったけれど切断せずになんとかなって、今は日本で元気だ。

無鉄砲に辺境地などに飛び込んでいくとそんな小説みたいな出来事に冗談みたいにいっぱい出会う、ということを身をもって知った。

パタゴニアはぼくが世界で一番好きなところだ。南米のチリとアルゼンチンがアンデス山脈に沿って南極のほうにまっすぐ延びていく広大な（日本の四〇〇倍ぐらいある）エリアだ。マゼラン海峡をチリの一番小さな軍艦で南下していくのがそこでの最初の旅だった。そのあと時期を変えてパタゴニアのいろいろなところに行った。やっぱり思いがけないドラマにもいろいろ遭遇した。馬でしかいけないルートもあってその馬を借りるためにカルク牧場というところをたずね、一カ月ほど下働きした。それ以降その牧場に何度か泊まり込み、毎日馬の訓練をしてどんな



馬にも乗れるようになった。

途中にセロ・カステーヨといういつ行っても人口百人の村があった。そのあたりでガウチョ（南米のカウボーイ）と親しくなり、パイネという地球の牙みたいな岩山を一〇日がかりで馬で登り、撮影する仕事をした。ガウチョは二人ついてきてくれた。

山の上は雪がついていて馬で登っていくのは非常に危険なルートだった。ガウチョはそうとう馬に熟練していたし、日本人の我々もなんとかついていけた。「もし、怪我をしたらセロ・カステーヨの宿のマダムが看護婦さんぐらいの腕がある」というので安心だった。

けれど岩だらけの高山だったから崖道を落ちたら助からない、という話は聞かされていた。

事件は山奥の粗末な小屋に泊まっていたときにおきた。我々のリーダーだったガウチョの馬がその夜、プーマ（アメリカライオン）に襲われて大怪我をし、楽にするために殺すしかないということになったのだ。帰りの足となる馬は荷物を積んでいった馬があったけれど、山の男が自分の馬を失う、ということは、我々の生活でいえはクルマを一台失う、のと同じことだった。

ガウチョのぐったりした後ろ姿が気の毒だった。セロ・カステーヨに戻ると、そのガウチョの奥さんが昨夜急に産気づいて男の子を生んだ、という知らせがあった。看護婦さんのこころえがある宿の奥さんがとりあげてくれたのだった。落胆していたガウチョを元気にするなによりの朗報だった。苦しくてもなんとかなる、という教訓が大きかった。

椎名誠 プロフィール

1944年東京都生まれ。作家。
1979年より、小説、エッセイ、ルポなどの作家活動に入りました。これまでの主な作品は、『犬の系譜』（講談社）、『岳物語』（集英社）、『アド・バード』（集英社）、『中国の鳥人』（新潮社）、『黄金時代』（文藝春秋）など。近著は、『椎名誠［北政府］コレクション』（椎名誠・北上次郎編　集英社文庫）、『この道をどこまでも行くんだ』（新日本出版社）、『おれたちを齧るな！わしらは怪しい雑魚釣り隊』（小学館）。最新刊は、『毎朝ちがう風景があった』（新日本出版社）、『おなかがすいたハラペコだ。③　あっ、ごはん炊くの忘れてた！』（新日本出版社）、『続　家族のあしあと』（集英社）。旅の本も数多く、モンゴルやパタゴニア、シベリアなどへの探検、冒険ものなどを書いています。趣味は焚き火キャンプ、どこか遠くへ行くこと。
公式インターネットミュージアム「椎名誠　旅する文学館」は、
http://www.shiina-tabi-bungakukan.com

2020年11月現在

この政権に命や暮らしを託すわけにはいかない

新型コロナウイルス（COVID－19）の感染拡大と政府のちぐはぐな対策ゆえに社会が混乱して、早くも1年が経とうとしています。「決して人命最優先ではない」政府の方針は、多くの弱者と医療従事者を追いつめていて、この政権に命や暮らしを託すわけにはいかない、という思いが募ります。

選択的夫婦別姓の実現に向けて前進、かも？

その菅政権の下で、大きく動く可能性があるのが、選択的夫婦別姓の実現です。安倍前首相と菅首相の大きな違いは、ウルトラ保守とも呼ばれる極端な右翼思想が背景に無い点です。安倍前首相は首相になる前から性教育への攻撃、従軍慰安婦はデマだとする歴史修正主義的な運動に深くかかわってきましたが、菅首相にそのような思想がなく、選択的夫婦別姓に賛成する立場を明らかにしていたことは、数少ない希望の1つです。閣僚の中では上川法務大臣も以前から選択的夫婦別姓に賛成していて、小泉環境相も選択が可能な社会の実現の重要性を述べた上で「反対する理由は何もない」と明言しました。

シリーズ

いま、なぜ憲法改悪なのか パートⅡ

㉞ 選択的夫婦別姓、実現に向けて前進、かも？
～慌てる保守議員に、理屈なし！～

「明日の自由を守る若手弁護士の会」共同代表　黒澤いつき
公式ブログ　https://www.asuno-jiyuu.com/

とはいっても、菅首相に確たる人権意識があるわけでもなく、自ら率先して反対派を説得して強いリーダーシップを発揮することはないでしょう。一刻も早い実現を求める世論を、さらに拡大させて、突き上げていかなければなりません。

案の定、安倍首相と並び極端な保守思想を持つ議員たちは危機感をあらわに議員連盟を作って大反対し、政府の基本計画の（選択的夫婦別姓の実現に非常に前向きな）内容を後退させようとしています。

例えば高市早苗氏は「子供をどちらの姓にするかをめぐり両家が対立するなどの混乱が起きる。子供の福祉のためにも、夫婦、親子が同氏であることを堅持したい」と述べました。いまだに「両家」、という言葉を先んじて使うあたりにまず驚きますが、「夫婦別姓が子どもの福祉を害する」という主張には根拠はなく、むしろ世界を見渡しても同姓を強制する婚姻制度が日本だけであることからしても、反対する方々の思い込みでしかありません。そもそも、子どものいないカップルの存在を否定するかのように「結婚」を無条件に子どもと関連づけて意味を見いだす発想は、やめるべきです。

また、下村政調会長も「これまで紡いできた家族の絆や相互扶助社会全体の在り方に深く関わるため、くれぐれも慎重な対応をすべきだ」と述べました。大事なのは女性の人権や尊厳ではなく、「家族の絆」だというわけです。従来から主張してきた「伝統的家族」「家族の一体感」を言い換えただけですが、いずれにせよ、定義もない実態不明なものを持ち出して人権より優先する、という考えは常識的な人権感覚と乖離（かいり）しています。むしろ「見たいものしか見ない」「聞きたい声しか聞かない」という不誠実な姿勢しかありません。

国民と自民党の感覚のズレ

これらの考えは、いずれにせよ「同姓を望むカップルは同姓を選べばいい」という反論で封じられ、別姓を望み、姓が異なったままでも強い絆で結ばれているカップルの結婚を妨げる理由にはなり得ません。最新の報道では、2015年以来、改めて最高裁の大法廷が、夫婦の同姓強制が憲法に違反しているかどうか判断することになりました。ジェンダーに関する自民党の感覚の異様なほどのズレや多数の国民が別姓と言う選択肢を望んでいる事実を、国会で野党が追及して明らかにしていくことは、最高裁へのアクションとしても有効です。選択的夫婦別姓の実現へと世論を盛り立てていきましょう。

シリーズ

縮図からみる世界【33】

斎藤　貴男

古い推理小説を読むことは…

久しぶりに会心の読書ができたので報告したい。西東登『蟻の木の下で』。1964年に第10回江戸川乱歩賞を受賞した作品である。

少し長い原稿を書くと、古い推理小説が無性に読みたくなる癖が私にはあって、今回もそれで読み始めた。ストックしてある未読本の山から、適当に選んだだけだったのだが…。

――東京都内の動物園で、野々村という中年男の死体が発見された。無惨な裂傷があり、ヒグマの檻の前でもあったので、警察は当初、その主にやられたのだろうと推定。しかし、これは事故などではなかったのだ。

次に、あるカメラメーカーの若手社員が、出張先の東南アジアで不慮の死を遂げる。彼の取引先で、野々村の戦友でもあった池見は、通夜の席上、終戦直後のタイ奥地における俘虜生活を語った。

それは恐ろしい記憶だった。もう1人の戦友・矢ノ浦が、祖国に残した妻子の写真を元上官に強奪される。そして…無数の人食い蟻の棲む木の下に追い込まれた矢ノ浦は…。

場面が現代に戻った後も殺人は続いた。真犯人による告白の手紙と、その妻だった女の遺書で締め括られるラストが、あまりにも悲しい。

本作は前回東京五輪の年に発表されている。日本はめざましい高度成長の只中にあり、『経済白書』が「もはや戦後ではない」と自画自賛してからも、10年近い歳月が流れていた。

著者の西東は、この言葉に強い反発を感じたらしい。実際、本作からは戦争と軍隊組織、一部軍人に対する憤怒に満ちている。

西東自身はいったい、どんな戦争体験を持っていたのだろう。本作が書かれた当時はまだ小学校にも上がっていない子どもだった私は今回、ああ、あの頃の両親や、周りにいた大人たちの多くも、同じような思いを共有していたのに違いないと、改めて思った。

もちろんミステリーとしても一級品だ。これほどの作品が、映画やテレビドラマにもならないまま埋もれているのは、まさにその、著者の執筆動機に理由があるのではないか。今日に至ってもなお、戦前からの世襲人脈に支配され続けている社会では、本気で戦争を許さない魂がメジャーにのし上がっていく道は、とてつもなく狭いのである。

はたして現在、アマゾンのレビューやブログの類を眺めると、本作の主題を軽んじ、派手なトリックが出てこない点などを難じて、他の乱歩賞作品と比べてレベルが低いなどという訳知り顔ばかりが目立つ。古い推理小説を読むことは、そのような人間にならないための戒めにもなると感じた次第。

斎藤　貴男（さいとう　たかお）

1958年東京生まれ。早稲田大学商学部卒。英国バーミンガム大学大学院修了。主な著書に『機会不平等』『国民のしつけ方』『戦争経済大国』『平成とは何だったのか』『驕る権力、煽るメディア』『決定版 消費税のカラクリ』など。